フィルム・コメンタリー 10月28日号

- 映画時評 脈絡なく映画を見ながら-

映画時評として映画の話をする前に、ニュースを一つ。映画の企画・製作・宣伝・配給を行って来た株式会社アルタミラピクチャーズがこの10月8日に東京地裁から破産開始決定を受けました。倒産という事態を迎えたわけです。かつて、周防正行『Shall we ダンス？』（1996）矢口史靖『ウォーターボーイズ』（2001）を世に送り出した独立系プロダクションです。約5億3千万円の負債総額ということで今後の成行は不明です。

■ ウディ・アレン『マンハッタン殺人ミステリー』（1993）

この頃のウディ・アレンは一つのピーク期を迎えていました。ほぼ毎年新作を発表し『世界中がアイ・ラブ・ユー』（1997）辺りまでの長い期間にこのピークは続きます。本作では今年2025年10月に亡くなられたダイアン・キートン（1946年生）が共演、いつもながらのニューヨーク・ファッションを見せてくれます。筆者がスクリーン上で最後に見た作品は、ビル・ホールダーマン監督『また、あなたとブッククラブで』（2018）で、ジェーン・フォンダ（1937~）キャンディス・バーゲン（1946~ ）との興味深い共演作品でした。

本作は、ウディ・アレンのスタンダップ・コメディアンとしての面白さに加えてスラップスティック・コメディを具えた質の高いコメディであり、ミステリー作品でもあります。クスッと笑わせるところがいいのであって、大笑いさせる必要はないのです。ウディ・アレンは今年90歳を迎え（1935年生）、数々のスキャンダルに臆することなく、性癖を改めることもなく生きる姿は独自の美学、というと批判される恐れが多分にある訳ですが、を貫きます。彼は、ニューヨークという大都会に嫌という程こだわり、決してハリウッドに迎合することのない映画作家であり、孤高のクラリネット奏者でもあります。ダイアン・キートンとの機関銃的会話（やりとり）は苛々を募らせるところでもありますが、英語さえ十分に理解できれば、この都会的な笑いが理解できるのだろうにと悔しさが残ります。ラストでは、オーソン・ウェルズの『上海から来た女』（1947）のミラー・ハウスで繰り広げられる銃撃戦を取り入れるという趣向に驚かされもし、オーソン・ウェルズへのオマージュも感じられるところでもあります。このシーンには脱帽しました。

■ ワン・トン（王童）『赤い柿』（1995）

福岡アジアフィルムフェスティバルでは、昨年に続いて今年も王童の作品の上映機会を作っていただき大変有意義な内容のものになったのではないでしょうか。昨年は『無言の丘』（『無言的山丘』1992）『村と爆弾』（『稲草人』1987）『バナナ・パラダイス』（『香蕉天堂』1989）の上映、そして今年は日本初公開の『赤い柿』（『紅柿子』1995）です。王童の自伝的作品とも言える作品であり、1942年中国安徽省で生まれ、内戦勃発により台湾へと移住した国民党軍幹部の王童は台湾で教育を受け、1966年に台湾国立芸専美術科から中央電影事業に入り、1980年に監督デヴュウしています。これまで十七本の作品を監督しています。本作は、子だくさんの一家の台湾での生活をユーモアを交えて描いた作品で、子どもたちの祖母の死までの一家の生活を丁寧に描いていきます。台湾映画といえば、侯孝賢（1942~ ）エドワード・ヤン（楊德昌 1942~2007）にスポットライトが当てられがちですが、彼らとはテイストもトーンも大きく異なる王童の特徴は、所謂小市民の視線からの社会の展望であり、毎日の生活をいかに送っていくか、その切羽詰まった辛苦の道が待ち受けていたとしても独自のユーモア感覚で乗り切っていくというある種の楽観主義が見て取れます。軍の高級幹部の父親が、武家の商売の典型例のように様々な商売に手を出しながらもことごとく失敗する様子は、滑稽ながらも決して笑って済まされることではありません。しかし、そこには楽観的な空気が充満します。映像的に特に特徴的な巧みさと美しさが存在する訳でもなく、またケレンがある訳でもなく物語は淡々と自然に流れて行きます。その長閑さに似た鷹揚な流れこそが王童の特徴であり魅力ではないでしょうか。作的な強みと弱みがそこにあるのですが、本作では確実に強みとして発揮できています。そして、そこからは王童の計り知れない人間的な大きさを感じるとともに、ラストで見せた葬儀の列と軍事演習中の兵士たちの隊列の対比は、台湾の置かれた複雑な国家環境を見事に描写したものだと感じ入ったところでもあります。

■ フィーラ・バーテンス『MELT メルト』（2023）

ローラ・ワンデルの『Playground 校庭』（2021）

フィーラ・バーテンス（1978~ ）の長編第一作作品で、彼女は女優・歌手としてのキャリアを持っているようです。これは主人公の女性エヴァの復讐劇を描いたものであり、13歳のときの忌まわしい出来事がトラウマとなり、生きていくこと自体が苦しくてたまらない描写がひしひしと迫り来ます。実に悲劇的な作品ですが、カメラは常に対象を極めて近い距離で捉えバストショットより近い距離を中心に映し出し、光は自然光を取り入れたナチュラルな柔らかい雰囲気を醸し出します。フィーラ・バーテンスが取り入れたこの撮影手法については、今年公開されたローラ・ワンデルの『Playground 校庭』（2021）をすぐさま連想しました。ローラ・ワンデル（1984~ ）もフィーラ・バーテンス同様にベルギーの女流映画監督です。この作品はローラ・ワンデルにとってのデヴュウ作で、この撮影手法を採ることでドキュメンタリー作品と見紛うほどの迫真性を生んでいます。この作品は、小学校に入学した7歳のノラが初めて足を踏み入れた小学校という社会の中で、子どもたちだけの世界で繰り広げられる苛烈な人間模様を目の当たりにすることになる様子を描いた作品で、日経解説委員の古賀重樹の言葉を借りれば「校庭はノラにとって初めて出会った社会だ。（中略）そこは不条理に満ちている。善意は報われず正しい行為が災いを招く。助けを呼ぶ声は届かない。（中略）それはまさに我々が生きている社会の縮図ではないか」という痛烈な社会批判を含んだ佳作でした。何かしらこの二人のベルギー人映画作家には共通点があるように感じてしまうのです。フィーラ・バーテンスの描いた社会なり世界もまさに「不条理に満ちている。善意は報われず正しい行為が災いを招く。助けを呼ぶ声は届かない」存在なのです。また、この不幸な少女たちの姿からは、アニエス・ヴァルダの『冬の旅』（1985）のモナという最後にはとうとう力尽き死に至る18歳の女の子の不幸を想起してしまいました。

ベルギーには、驚異的な傑作『ジャンヌ・ディエルマン ブリュッセル1080、コメルス河畔通り23番地』（1975）を発表したシャンタル・アケルマン（1950~2015）という女流映画作家もいました。ベルギーという国における女流映画作家の系譜の中で、シャンタル・アケルマンから始まった流れは、フィーラ・バーテンスそしてローラ・ワンデルへと確実に続き、そこには決して幸福とはいえない何らかの問題や心の傷を負った弱者への眼差しを痛烈に感じるのです。この二人のベルギーの女流映画作家には今後も目が離せません。